

〔Ⅲ〕 分科会の概要

※出席者は助言者、本校教官を除く。

1. 教育課程分科会 出席者数 午前17名 午後12名

①川田基生 “新教育課程と学校に基礎をおく教育課程開発 (SBCD)” —教育課程評価を端初として—

・質問 「カリキュラム作成の問題点の具体的なものは何か」 (大府東高校 中道先生)

応答 「上からの押しつけでなく、多くの人の声を盛り込みたい。その取舍選択が問題点の1つであろう。」 (発表者)

・質問 「どのような生徒層が入学し、卒業時にはどのような育っているか」

応答 「本校では問題を抱えている生徒が、次第に多くなったが、自分で無理なく判断できる生徒を育てたい。」 (発表者)

情報 「大府東高では、効果的に叩き込んで出口をしっかりとす。つまり、国公立大へ多く入れたい。朝練はなし、日曜日は登校するな、勉強に打ち込め。と指導してきたが、最近、部活を充実したいという意向が強くなり、進学のための負担と更に部活等の負担も増加しつつある。

②齊藤真子 “新教育課程編成への準備調査報告”

・質問 「教育課程編成上、保護者側の要望、生徒の実態、進路上の諸条件をどのように反映させ、どんな手法をとるのか。」 (本校非常勤講師 長尾先生)

応答 「教科・科目の性格と学習内容を踏まえて編成に取り組み、生徒の特性に応じた弾力的(選択科目の導入を含む)な編成作業に心して教科指導に当たれば、進路指導に矛盾するものではないと考える。」 (発表者)

・質問 「今回のアンケート集計結果をどの様に生かすつもりか。」 (助言者)

応答 「要望は多岐に亘るし、事項によっては相容れないものもあるので、すべてを包含出来るものではないし、新学習指導要領に沿わない事項もあるので、教育的に見て適正な判断を下し乍ら取り入れたい。何れにしても偏見に陥らないことが肝要であると思う。」 (発表者)

補説 「アンケートの集計結果を見る限り、選択科

目の開講の現状と今後の設定や補習・補充授業について、教官側・保護者側・生徒側の三者がそれぞれの分野で、その考え方がほぼ三分の一程度ずつりグルーピングできる。」 (本校 倉田先生)

補説 「学校五日制 (週休二日制) への対応についての関係資料は、『本校紀要 P94~95』を参照されたい。」 (発表者)

・質問 (1)教育課程編成に関わる保護者・生徒(実態)などの要望・考えにどの様に対応し、そのための教官レベルでの合意作りにどう取り組むつもりか。

(2)愛知県下の公立高にみられる学校間格差の広がりに対する教育課程編成浄の問題点と適切な打開策は何か。

(3)教育課程における学校独自の編成は、どこまで許容されるか。(自主編成による実施と展開で、一部私学で問題視され、社会問題に発展する場合の具体的事例もある。) (椋山女学園高校 中川先生)

応答 「必修教科(科目)は遵守しなければならない。法的拘束力の枠組はあるものの、選択科目で現行より弾力的に取り組める幅が広がった。そこでの自主的編成を生かすべきだ。ただし、「振替え扱い」には慎重を期されたい。私立高で問題となった「体育」を他の教科で代替えるなどはいけなない。施設・設備が不十分だからという理由は成り立たない。条件整備するなどの努力をして履修させるべきである。教育課程編成の着手は、まず現行教育課程の評価から始めるべきだと思う。教官レベルの合意作りは本附属のような場合、教官が相互に尊重される環境にあるから速やかな合意形成は容易ではない。しかし、時間をかけても論議を尽くして、まとめ上げる努力を惜しんではないと思う。」 (助言者)

発言 「名大附属高の様な存在と学校経営は、今後とも存続し、継承して行って欲しい。」 (椋山女学園高校 中川先生)

・質問 「高校体育の教科目的は何か。学校体育に対

する考え方に最近変化が見られるが、どの様に受け止めるのが妥当か。」(四日市南高校伊藤先生)

応答「保健や心理を含む精神的な側面は、学校体育で重要である。授業時間内における生徒の運動量も多くしたい。いわゆる汗をかく体育授業を重んじたい。考え方の変化は確かであり、問題の一つにリラクスの体得法の工夫と検討が必要ではないか。リクリエーション的要素の導入の主要国の傾向である。

学校五日制の問題は避けて通ることのできない潮流である。一日の授業が七時間になることは、必定であろう。部活の社会体育への移行も視野に入るだろう。米国の場合、家庭教育の充実として土曜日を活用する傾向にあるが、基礎条件として健全な家庭が確立していなければならない。派生する問題は決して少なくない。」(助言者)

情報「本学事務職の場合であるが、昨年度四週六休、本年度四週八休を導入実施されている。勤務上支障のある場合は他の曜日で代替えている。」(本校 杉山先生)

○指導・助言の内容

教育実践を通し、それを踏まえた教育課程の編成作業が大切である。情報化、国際化の視点も欠落させないで、新学習指導要領をベースにして取り組まされたい。

親の希望・要望と学校の教育目標や教育方針とのギャップは新しい教科・科目の設定、選択制の有効的な活用で教育課程を開発し、生徒の実態把握により即応した教科・科目間の連携を重視した改革に取り組まれたらいかかと思う。(名古屋大学教育学部 的場先生)

- (1)学校単位で教育課程委員会なるものを常設し、編成作業に取り組まれたらいい。
- (2)作業構成の手順は、現行教育課程の評価→それを踏まえて整理・検討の上開発・編成→実施(実践)→改めて評価を加える(繰り返す)ことによってより良い教育課程の確立に努めたい。教育課程の評価の具現は児童・生徒の姿そのものである。
- (3)自由と規律のある生徒像を望みたい。
例えば、基本的な生活様式を体得した生徒の実現。学習・学問に取り組む意欲のある生徒の実現。
- (4)生徒を取り巻く環境を見極め、保護者・生徒の考えや動向を視野に入れながら可能性を考慮して教育課程を作成・編成したらどう

うか。

(5)中学生は、個性をさぐる時期→広く、浅く、短く。高校生は個性を深める時期→狭く、深く、長く。

選択制の原理・原則に立って生徒自身の意思決定に委ねることを共通の指針をした。い。(名古屋大学教育学部 安彦先生)

2. 国際理解分科会 出席者数 午前41名 午後29名

①矢木 修“国際理解に関する中学生・高校生の意識”

・質問「関心の度合いが、教育文学に少ないのか。調査をして新たに分ったことは何か。」

応答「AFSより留学生の依頼を受けるものの、日本語のできない子はだめであると断るが、生徒はもっと受け入れるべきだ。関心のある地域としては、先進国が予想されたが、高校生は、やや他地域へも目が向いている。」

②石川久美“海外滞在者の事例研究”

・質問「ドイツから帰国した子が授業に出なかったり、卒業式を中座したことに対する指導はどのようにしたか。」

応答「周囲の子が慣れてしまっている。説論にとどめた。」

・質問「米国より帰国した子の立ち直ったきっかけは何か。」

応答「授業を抜け出したり、登校拒否的になった。また、遅刻も多くなったが、くり返し話を聞いてやっているうちに、友人ともうまくつき合えるようになった。」

意見「海外留学は、どこへ行っても同じであり、要は外国人の生き様を知ることにより国際理解をするのである。帰国後の違いを生じるのは、周囲の状況によるのではないか。」

意見「夏休みにホームステイをさせた女子が、価値観が変わり、帰国後服装が派手になり出した。まだ本人の自我がしっかり確立しない時期に海外留学は、いかがなものか。」

③山本岩男“文化祭における国際理解教育”

・質問「野外学習について、年間どれくらいの時間をかけてオリエンテーションを行っているのか。中学から高校へのつながりはどうなっているのか。」

応答「高校は以前は理科の学習として行っていたが、理社を総合した行事になっている。またこの野外学習は、中学3年の修学旅行とつながっていて生徒自身が目的意識を持って行動するようになっている。」

④米山 誠“ロシア語クラブ（中・高）における国際理解教育の試み”

○指導・助言の内容

国際理解は学問ではないし、定義もないかもしれない。それよりも、すでに体験しているものをもとに考察を進めるべきである。また、国際化には、予想もつかないことが生ずるのであって、例えば、名大の留学生でも10年前の60名が現在500名となっている。先生も、teacher から instructor となった。そして、手さぐりの状態でやっているが、これこそが国際理解の真の姿である。また、国際的なトラブルも、これ乗り越えてこそ新しい展開がある。(名古屋大学教育学部 堀内先生)

1. 国際理解が日本の伝統文化の喪失につながるというおそれをなくすべきだ。
2. 外人という言葉はなくすべきだ。
3. 留学生の言によれば、日本人はとっつきはいいが友人はできないとのこと。これは、集団の価値の方が個人の価値に先行しすぎるのではないか。
4. 言葉の問題について正確に上品にすべきだ。言葉そのものの教育も必要である。米山先生のロシア語クラブの持続は立派である。中国語、ハンゲルは日本人にとって容易なので推める。
5. 点数をつけない→テストの尺度でやると測れないことが多いので。(名古屋大学教育学部 馬越先生)

3. 平和教育分科会 出席者数 午前20名 午後17名

①丸山 豊“本校における平和教育の歩み—総論—”

・質問「平和教育と命との問題について、どう考えているのか。」

応答「他の発表（総合学習）を聞いて欲しい。」

・質問「他校の生徒との交流は、どう考えているのか。」

応答「研究旅行に行った場合などは、現地の学校の生徒との交流が考えられる。」

②高木 徹“演劇を中心とした平和教育”

③山田 孝“研究旅行を中心とした平和教育”

・質問「大久野島での毒ガス工場の扱いは、どうしているのか。」

応答「中学3年での研究旅行に入れようとしている。」

・質問「国際化と平和教育の関係は。」

応答「過去の日本軍国主義をしっかり反省できてはじめて国際人である。」

応答「朝鮮人への仕打ちの反省は、長崎修学旅行でもできる。朝鮮人被爆者を扱えばよい。また、南京大虐殺をした元日本兵士の話の聞いても、加害者としての日本を学べる。」

応答「広島修学旅行で、軍都としての広島を学ばざるを得ない。」

④板倉 寛“名古屋学院高校における実践教育—沖縄修学旅行の取り組み—”

⑤徳井輝雄“平和教育としての総合学習の実践”

～分科会全体を通しての討論～

・質問「平和教育は、生徒の日常生活に根付いているのか。」

応答「いじめやけんかがあり、根付いているとはいえないが、将来、この平和教育が役立ってくれるのではないか。」

・質問「高校入試を改善して、中学で現代史が学べるようにして欲しい。」

応答「高校入試に悩みながら中学で平和教育をしている。」

意見「大学に受かることは本人の努力の結果である。学校では、完成教育に力点を置き、大学入試を気にするな。」

意見「東大附属も大学入試は良い成績ではないが、1年浪人すればよい。父母からの評判は悪いが、大学の先生からは評判が良い。ゼミで、自学自習をする時、その方法が身についているし、共同研究では、リーダーになる。そして、研究の見通しを立てることができていることが評判の良い理由だ。」

・質問「旧日本の加害者としての認識が必要だが、どうするのか。」

応答「広島でもできる。どうして広島に原爆が落とされたかを、萩……明治維新、広島……加害者と被害、大久野島……毒ガス加害、と日本の近代化の歴史の加害性について、注目させようとしてきた。」

○指導・助言の内容

・平和教育は、困難な条件が多く、多様なレベルになる。附属学校は、日本国民の実験校として、この平和教育の実践成果をもっと広めて欲しい。

・加害者としての日本の認識のほかに、まだ平和教育に欠けているのは、戦争にどう抵抗したかという抵抗の歴史を教えることだ。戦争を阻止する運動は、創造の運動だ。

・広義の平和教育は、構造的暴力を教えることだ。現在の教育行政の下では、戦争に反対する狭義の平和教育は先細りがちになるから、

この狭義の平和教育にもっと力を入れるべきだ。

- ・中高一貫教育の中で平和教育はどうあるべきかを考えて欲しい。今日の発表では、中学が弱い気がした。三年間で「平和科」を学ぶというように新しい科目を創出して欲しい。
- ・平和教育の困難さは、指導要領の枠を突破するところにある。研修をしっかり行い、若者に真に生き抜く力を与えるものこそ平和教育だという確信をもってやって下さい。(日本福祉大学 柿沼先生)

4. 学校行事分科会 出席者数 午前13名 午後12名

①中村明彦“中学1年生オリエンテーション合宿の実践報告”

- ・質問「中高一貫は、今年から始まったことか。」
応答「現在の中学2年生からである。」
- ・質問「合宿の中で、今回の基本テーマは、どのような場面で色濃くあらわれているのか。」
応答「初年度ということで、特に考えなかった。英会話のトレーニング、平和に関する催物をしてほしいという希望はあった。」
- ・質問「生徒主体の行事をさせるには、大変な労力を必要とする。この時期では、そういうやり方の行事は不可能ではないか。」
応答「オリエンテーション合宿を発表のみにしてしまうと事前の準備は大変である。合宿の中で準備を行うとよい。」
- ・質問「生徒の組織づくりは。」
応答「現在の生活班内で各係を決め、係担当の先生の指導を受けさせた。」
- ・質問「早い時期に行うオリエンテーション合宿の固有の課題は何か。また、生徒の実態からくる合宿の必要性はあるのか。」
応答「こちらから刺激を加えてやらなくても、合宿をすることによって、自然なかたちで友達づくりができる。早めに行うことで大きな成果があると思う。また、行事での取り組み方を早い時期に体験することも大きな意味がある。」
- ・質問「先生の評価・感想はどうか。」
応答「生徒の交流が活発にできた。学年の先生に負担がかかりすぎる。」

②長谷川弘“文化祭での平和教育指導の試み”

- ・意見「2年前から文化クラブの発表の場として、1日行っている。今年から生徒会で計画を立てさせるつもりだが、経験・時間もなく難しい。」(豊山中学の例)

○指導・助言の内容

- ・オリエンテーション合宿については、中高一貫のひとつの試みとして注目される。問題として教師の負担増などがあげられる。他の公立中学では、このような合宿が可能かどうか。
- ・文化祭では、すべての生徒に役割がある点が良いと思う。演劇は、自己表現をする場として大切にしていって欲しい。ここでも、教師の負担増などの条件整備の問題を考える必要がある。(名古屋大学教育学部 榊先生)

5. 生徒指導分科会 出席者数 午前19名 午後16名

①加納啓司“帰国子女教育について”

- ・質問「不適応生徒の受け入れはどうか。」
応答「特別な場合は、受け入れている。」
- ・質問「女子の数が多いいのは何故。」
応答「男子は普通校へ通わせる場合も多く、また、現地に残る者も多い。」
- ・質問「文系に比べて理系への進学は困難なのではないだろうか。」
応答「講座は開設しているが、選択者は少ない。」
- ・質問「特別指導の実態は。」
応答「謹慎および校長訓戒は行うが停学はない。」

②鈴木克彦“緒外国と日本の生徒指導との違い—国際理解の一助として—”

- ・質問「アンケートの中高分類はしてあるのか。」
応答「アンケートそのものにはあるが、集計結果には出ていない。」
- ・意見「アンケートのまとめの中に、回答者の年令も入れて欲しかった。」
- ・質問「アンケートのまとめを見たときの生徒の反応は、どうだったか。」
応答「興味は強く示しているが、まだ発展の段階である。」
- ・質問「国際クラブの位置づけは。」
応答「附属の時間に行っているクラブ活動である。」
- ・質問「中・高の校則を分けているのか。」
応答「実際分けて指導している。」

○指導・助言の内容

- ・帰国子女にとっては、日常会話とは別に学習用語のマスターが非常に困難である。
- ・国際理解を異文化理解ととらえ、それは、人間同志の理解にほかならない。人と人との関係が密であるという点から、生徒指導と国際理解の結びつきは深い。
- ・理解に決めつけは良くなく、先ずお互いに意見交換をする必要があり、一つの事実をお互

分科会の概要

いにどう考えるのかということが大切である。(名古屋大学教育学部 梶田先生)

- ・南山中・高国際部の教育目標・方針は、きめ細かいという点で素晴らしい。
- ・生徒指導とか校則は、個人の発達目標を設定したものであろうが、時代にそって柔軟に考えていく必要がある。理解とは誤解から始ま

り、人と人との理解があって始めて生徒指導も成立する。

- ・日本の場合、集団同調主義で完璧でないといけないというのが特徴だが、もっと柔軟に考え、それを学校教育にも取り入れていく必要がある。(名古屋大学教育学部 田畑先生)